

## 加賀市体験活動プログラムレポート

東京大学法学部3年 佐々木麗

9月17日～21日の体験活動では、観光にまつわるさまざまな分野の勉強と貴重な体験をさせていただきありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

このレポートでは、寺前市長のご講義で頂きました宿題のランドマークと越前加賀宗教文化街道のネーミングについての2点と、体験活動を通じて感じたことを4点、提言させていただきます。未熟なレポートではございますが、お納めくださいませ。

### 1. ランドマークについて

市長も仰っていたように、加賀観音をその見た目だけで加賀市のランドマークとして売り出すことは難しいと思います。方策としては2通りの方法があるのではないかと考えます。第一に、加賀観音に、加賀市民に愛されるような「物語」を付して、物語ごとランドマークとして売り出すという方法。第二は、加賀観音はさしあたり措いておいて、加賀ルージュなどすでに比較的容易に観光資源化できるものを加賀市全体のシンボルとしてより強く売り出していく方法です。

第一の方法についてですが、加賀温泉駅に降りた時に加賀観音は必ず目に入るので、あれはなんだろうという疑問をもつという意味では加賀観音のインパクトはそれなりに大きいだらうと思います。ただ、たとえば地元の方に「あの観音様は何ですか？」と尋ねた時に歯切れの悪い答えしか返ってこないというランドマークとしての機能は果たせない—というかむしろ印象が悪くなる—かもしれませんので、加賀観音を活用するためには、加賀観音自体が加賀市民の皆様から愛されていることが必要です。現在は、バブル崩壊の際の遺物というような悪いイメージが付きまとう状態になっているようですが、バブル崩壊からの復活ならばよい物語と言えるようになるでしょう。現地の詳しい状況については存じ上げませんので具体的な提言までは出来ず申し訳ありませんが、たとえば現在いかにもさびれた観光地という状態になっているものをそれなりに観光地として成立する状況に持っていか、いっそ市民にとって住みよいく普通の街にしてしまうのでも構わないと思います。すくなくとも市民の皆様が加賀観音にポジティブなイメージを持てるようにすることが、加賀観音をランドマークとして観光に活用する前提として必要だと考えられます。

第二の方法として、加賀観音に対する市民の皆様のネガティブイメージが変わらないとした場合ですが、加賀観音に代わる新たなランドマークとなるもの

を一から作ることはコストの点からも難しいでしょう。また、今回の体験活動プログラムを通じた個人的な印象ですが、加賀市の魅力のひとつに、橋立・東谷の重伝建地区や大聖寺の伝統ある古い町並みと、古い時代の息吹が現代の市民生活の中に(一見して)違和感なく溶け込んでいることが挙げられるのではないかと感じました。人工的に新たなランドマークを作ることは、一步間違えば伝統的なものの良さが壊されてしまうリスクを負うこととなります。それであれば、例えば加賀温泉駅のすぐそばにできる予定の統合新病院のデザインに赤瓦を部分的に取り入れる、駅前を景観整備地区に指定し、今後建築される建物は赤瓦を使用した和風のを原則とするなど、加賀市を訪れる人が最初に目にするエリアに加賀市らしい風景を集中的に配置するという方法もあるかと思えます。現在ある建物がおよそそのような景観と調和しえないというほどのものではないので、不可能ではない方法だと考えます。

## 2. 越前加賀宗教文化街道のネーミングについて

「死生観」にウェイトを置き宗教文化資源をめぐる周遊ルートの愛称ということですが、ルートに含まれる宗教が多岐にわたっているので、あまり宗教色を強く打ち出してしまうと、誰にとっても行きにくくなってしまわないかと思えます。特定の宗教(宗派)の熱心な信者であれば他の宗教(宗派)のゆかりの地には足が向かないでしょうし、特定の信教がない人にとっては宗教色が前面に出ていると敷居が高く感じられる恐れがあります。

あくまで主観なので広く受け入れられるかどうかはわかりませんが、市長のご講義の中で挙がっていた例の中ですと「越前加賀宗教文化街道～いのちの道」くらいの柔らかさがよいのではないかと思いました。個人的に考えたアイデアを一つ挙げるとすれば「越前加賀こころの道」くらいでしょうか。

## 3. 加賀温泉駅内の加賀市観光情報センターについて

加賀温泉駅を利用したのは初日の集合時と最終日の朝 CAN BUS に乗車しようと向かったときとの2度だけなのですが、なんとなく、観光情報センターの影が薄いように感じてしまいました。最終日の方は、観光情報センターのオープン時間前(8:40頃)だったためにそう感じただけなのかもしれませんが……。

駅構内に「加賀温泉郷」のロゴ・シンボルマークを前面に押し出すようにしてアピールしたり、観光情報センターの方へ人の流れができるような案内板を出したりして、観光情報センターを中心に「観光地に来た!」というイメージを強められるといいのではないかと思います。加賀市内の観光地はそれぞれ特色がありますが、首都圏に居ながらにして手に入りやすい情報だと、山中・山代・片山津のうちどこか一か所の温泉を目的に加賀市へ行こうとなるのが普通

かなと思います。市販されている観光ガイドブックに掲載されにくい温泉以外の観光資源が見過ごされてはもったいないので、まず観光案内所へ行きやすくすることには市内観光の人の流れを作るうえで意義があると考えます。

#### 4. CAN BUS の利便性向上について

慣れない土地で路線バスを使うのはなかなか難しいことなので、観光周遊バス CAN BUS があることは観光客に安心感を与え、良い効果を生んでいるのではないかと推測します。ただ、海まわりと山まわりとの 2 ルートに分かれておりそれぞれ 1 周するのに 1 時間以上かかるうえ、乗り換えが加賀温泉駅 1 か所ですみず、便数も 1 時間に 1~2 本なので、これだけで移動しようと思うとちょっと不便なのではないかという気もいたします。

特に、首都圏からの観光客の場合、いずれかの温泉に 1 泊 2 日で泊まろうと考えたとすると、(新幹線開業前の現状では)1 日目の午前 11 時半過ぎに加賀温泉駅に到着し、2 日目の 15 時頃に加賀温泉駅を発つという人が多いでしょう。この日程で 3 温泉すべてを回ろうとするとはじめからかなり計画的に動かなければまわりきれず、特に山中温泉 - 片山津温泉間の移動が可能な CAN BUS の便はごく限られてしまいます。

逆回りがあれば非常に動きやすくなりますが、より実現が容易と思われる案として、部分的な増便を提案させていただきます。海まわりルートに、山まわりルートの始発便と同様、停留所の数を減らした始発便を設け、例えば最低限「加賀温泉駅→JR 大聖寺駅口→加賀片山津温泉街湯→加賀温泉駅」くらいに停車するようにして、片山津温泉に宿泊した人が 9 時代前半の内に加賀温泉駅に到着するようにしたとします。さらに、それに接続可能な時間帯に、山まわりルートの山中温泉経由便をもう 1 便設けるとしますと、片山津温泉に宿泊した人にとってはかなり動きやすくなるだろうと思います。

また、CAN BUS と合わせて、路線バスで観光施設を回るための情報も入手しやすいようにまとめられていると大変使いやすくなると思います。CAN BUS がいくら使いやすいといいましても、1 時間に 1 本しかないと万一乗り遅れた時の安心のために他の交通手段も分かっていた方がより便利です。路線バスは当然それ自体として観光に特化しているわけではないので、観光客が使う可能性の高い路線・停留所だけピックアップした路線図や時刻表はバスに不慣れな者にとってありがたいアイテムです。

#### 5. 橋立地区北前船主集落の観光の促進について

個人的に、今回見学した地区の中で、橋立地区の重要伝統的建造物群保存地区はすぐれて統一された町並みをもち、散策するだけでも(言葉はよくありませ



んが)一種のテーマパークのように非常に楽しめる雰囲気の良い地区だと感じたのですが、そのわりには観光客はほとんどいないように見受けられました(単に私たちが行ったときが平日の日中であったためなら申し訳ありません)。これが、地元の方々の住環境を守るために観光地化したくないということであればそのまま構わないと思いますが、もしも観光客をいれてもよいのであれば、もっと重伝建地区全体を一体の観光地としてPRしてはと思います。

現在は、北前船主集落の中で観光施設として宣伝されているのは北前船の里資料館と蔵六園くらいだと思います。重伝建地区の魅力はもう少し地域内を歩き回ってみた方がよくわかりますが、これといった目的地もなく住宅地を歩くというのでは観光として売り出しにくいでしょう。そこで、重伝建地区の中にある商店などを巻き込み、スタンプラリーなどを実施して地域内をあちこち歩き回ってもらう仕掛けを作ってはいかががでしょうか。

#### 6. 首都圏での観光プロモーションについて

帰京後、駅や旅行代理店でどのような観光パンフレットが置かれているかを確認しようと数か所を見て歩いたのですが、「山代温泉」「山中温泉」「片山津温泉」のいずれかの温泉が前面に打ち出されたビラが1種類置かれているというところが多かったように思いました(サンプル数がそれほど多くないため、はっきりしたことは申せませんが……)。

正直に申しまして、山代温泉・山中温泉・片山津温泉の3温泉の名前を聞いても、どこにあるか即座にイメージできる人は、首都圏の特に若者には多くないのではないかと思います。「加賀温泉郷」であれば、「加賀」という言葉からああだいたいあのあたりだなというイメージは浮かびやすくなるだろうと考えられます。3温泉の名前から加賀温泉郷へとたどりつくよりも、加賀温泉郷の中に3温泉があると考えた方が、どの温泉にもなじみがない者にとってはわかりやすいので、観光パンフレットの前面に出すことばは極力「加賀温泉郷」で統一し、できれば3温泉合同のパンフレットを置くようにした方が、発信力が高まるように思います。各温泉の詳しい情報を得るためには、パンフレットからKAGA 旅・まちネットさんなどのホームページに誘導したり、情報発信拠点として石川県のアンテナショップなどを適宜活用してそちらに各温泉のパンフレットやマップを置くようにしたりということでも対応されてはいかががでしょうか。

また、18日の意見交換会の際に、SNSを使った情報発信についてもお話が出ていましたが、観光情報を集める主要なメディアとしてSNSを使っている人が多いという印象はあまりありません。ただ、インターネットでの情報収集では能動的に動かないと情報が入ってこないため、原則として他の媒体で加賀市観光に興味を持たせて関連するキーワードの検索をかけさせる工夫をしなければ



なりません。その手間を省くために観光情報サイトの URL を発信し、ワンクリックで観光情報を見られる(ひいてはそれをきっかけに実際に訪れやすくする)ようにするメディアとしては SNS も大いに使えると思います。場合によっては、観光地や観光施設のキャラクターのアカウントを作って、キャラクターが面白おかしく情報発信をしている体を取ると閲覧が伸びるかもしれません(保証はいたしません……笑)。

以上、つたない政策提言ではございますが、体験活動の事後レポートとさせていただきます。少しでもお役にたてることがあれば幸いです。

この体験活動では大変お世話になり、ありがとうございました。加賀市の観光産業のますますのご発展をお祈りいたしております。

「観光フィールド大学・加賀温泉郷まるごとキャンパス」に  
参加してのレポート

東京大学文科三類2年 前田歩

9月17日から21日まで四泊五日加賀市ですごした中で、気が付いたことを各項目にまとめた。ただの個人的な感想でしかないが、以下の感想が今後、何かの役に立てば幸いである。

・観音像

加賀温泉駅に着いた途端目に付いたものが、この観音像だった。ランドマークとしては、確かに現状では一番向いているかもしれない。初めて見たときは、ただ驚くばかりだった。同じ班の人の反応をみると、面白いとも思われるらしい。しかし、その光景を見慣れるに連れ、山の中に観音像が一つだけ突き出ている様は、調和が取れておらず場違いな感じを与えかねない。あの観音像をなくすというのも一つの案だろうし、いっそのこと開き直って他にも仏像の類を立てるのもありだと思われる。

・片野鴨池と柴山潟

片野鴨池のバードウォッチングは、自然と触れ合うと言う点で、もっとアピールできるものだと感じる。特に、子供向けにアピールしているようだが、大人でも十分楽しめるので家族連れにもいい。ところで、柴山潟の復活は、鴨の餌場として柴山潟をラムサール条約で保護すると言う運動とは両立しない。また、柴山潟の登録も、柴山潟の復活も、地元では大きなニュースがあるかもしれないが、首都圏で大きく取り上げられない可能性もあるので、実はそこまでの宣伝効果はないかもしれない。個人的には、柴山潟の復活が時期尚早に思える。

・九谷焼

恥ずかしいことに私は今回訪れるまで九谷焼について何も知らなかったが、知名度は悪くない。九谷焼美術館はもちろん市役所に飾られている作品や、金沢市にある伝統産業工芸館でも様々な作品を見たが、どれも非常に見栄えがするので、九谷焼と伊万里焼の論争でもなんでもきっかけにしてさらに知名度が上がってほしい。目立たないかもしれないが、山代温泉の古総湯の九谷焼タイルがとても美しかったのを覚えている。また、旅行の思い出として、九谷焼の絵付け体験は非常にいい。世代を問わず楽しむことが出来るので、この体験が大規模に出来ればもっといい。特に、近年自分の手で体験することや手作りが

もてはやされているので、人気が出ると思う。

・山中漆器

輪島塗が近くにあるせいなのか、どうもそこまで知られていないらしい。漆器は日本伝統工芸のイメージが強いので、和風のイメージを売りにしている（と思われる）加賀温泉郷の土産にはぴったりだと思う。漆をふんだんに使った山中温泉のはづちを楽堂を見学して、ろくろ引きの作品だけでも雑貨やインテリアとして十分喜ばれるものになると思った。その技術の素晴らしさに脱帽だ。

・赤瓦

私の出身地北海道には瓦屋根などほとんど存在しないため、瓦屋根というだけでまぶしく見えた。高所から大聖寺の町並みを見下ろしたときに全体的に赤っぽい瓦屋根が多いということは、町並みに統一感を持たせる効果が確かにある。ただし、橋立地区や東谷地区の保存・修繕された家屋の瓦屋根のほうが当然赤の部分が多く、歴史的な情緒も残っているので、こちらを最初に見てから大聖寺の町並みを見ると少々物足りないかもしれない。しかし、黒など他の瓦屋根に混じって赤い瓦の屋根があるのもきれいだと思う。

・キャン・バス

ルートの回り方が固定なことと、次の便までの時間が多少空いてしまうことを覗けば、とてもいい交通手段だと言える。加賀温泉郷の特徴として、小規模な施設や史跡が点在しており、それをつなぐ道や交通手段の整備が不完全だということがあげられる。キャンバスの停留場をまわれば一通りの観光施設をめぐることができ、かつガイドも道々聞くことができるので初めて電車やバスで訪れたものにとって必須のものだと思う。乗り放題券があるので値段も良心的といえる。私が乗ったときはほぼ貸しきり状態だったので、稼働効率の悪さが不思議だが。

加賀温泉郷の強みの一つは、江戸時代の大聖寺藩と、それ以前から続く歴史と文化である。大聖寺地区の寺社や、山中温泉の鶴仙溪など散策して楽しむ場所が多い。しかし、反面、歴史が嫌い、あるいは歴史に興味のない人間には何の意味も持たない施設も多い。北前船を知らないものからすれば橋立地区は赤瓦の古びた家が立ち並ぶ一角に過ぎず、加賀市出身の人物ゆかりの史跡もその人を知らなければ「ふむ」と納得されて終わりだ。歴史のない北海道出身の私からすると身近にこれだけの史跡があるのはうらやましいことだが、逆に長い歴史のある土地から訪れた観光客からするとすぐに飽きる恐れがある。これは



ある意味弱みともいえる。

一つの市で歴史も気風も泉質もまるで違う三つの温泉地を抱えているのは貴重なことで、これも加賀温泉郷の強みだ。観光地として整備が進む山中温泉、しっとりとした情緒溢れる山代温泉、新しく近代風な印象を与える片山津温泉という三つの温泉地の、それぞれの個性を壊してはいけない。ただし、この三つが強力に手を結ぶことは必要だ。たとえば、三温泉地の総湯や街湯をめぐるツアーもなかなか面白いと思う。一つ一つはこじんまりしていて一泊で終わってしまっても、三つそろえば三泊は出来る。あるいは、三度は訪れることが出来る。

弱みという点から言うと、交通の便の悪さが挙げられる。たとえ北陸新幹線が開通しても、金沢まで二時間以上かかるというのは関東圏の人間にとってやはり遠く感じられる。少なくとも気軽に行こうと言う気にはならないので、若い世代向けには、卒業旅行や長期休暇に的を絞るのがいいかもしれない。思い切って関東圏の観光客をあきらめるのも手だろう。また、加賀市中を移動する手段も事実上キャン・バスとタクシー程度しか思いつかないので、宿泊場所周辺から動きづらい。

それに関連して、加賀市には小規模な史跡や観光施設が数多くあるが、飛びぬけて集客力のある大きな観光地がないような印象を受ける。それが加賀市全体を観光地化する発想につながったと思われる。頭一つ飛びぬけた観光地がないのは、やはり知名度不足につながる。事前の手段として、小さくても質のいい観光地をネットワークでつなげると言うやり方を思いつくが、今加賀市で進められているのがきっとこれなのだと思う。自分で旅行計画を立てるのが苦手なもののために、ツアー化するのは常套手段だが、加賀温泉郷はそれが適している。

また、田畑と史跡と行政・商業施設がちぐはぐに散らばったような加賀市の町並みは、強みとも弱みともいえない。私個人としては嫌いではない。車窓から風景を見ていて飽きない。日ごろ東京のごみごみした風景を見慣れている身にとっては新鮮だった。しかし、まとまりがないのも確かだ。

加賀温泉郷は、若い時分に一度行っただけでは分からない深みがある。四日もいけば一通りの場所はめぐれるだろう。しかし、それでは十分にまわった気がしない。毎年ではなく、十年後、二十年後とある程度の期間をあけて訪れるのが一番ふさわしい温泉街のように思われる。そうして長い付き合いができそうなことはいい温泉地の条件なのではないかと思う。

本当はもっと書きたいことがたくさんありますが、とりとめもないのでここ

までとします。最後になりましたが、この体験活動を無事終えることが出来たのは、寺前氏を初めとする加賀市役所の皆さんと加賀市の皆さんが快く私たちを迎え、もてなして下さったおかげです。なれない土地で様々な迷惑をかけたと思いますが、仕事や事業や商売という関係以上のことをして下さったことに、感謝しています。その「おもてなしの心」が一度でも加賀市を訪れた人間の心を離さないのだと私は思います。今後の加賀温泉郷の発展を願い、お礼の言葉で締めくくろうと思います。

本当にありがとうございました。